

# 旭川工業高等専門学校 図書館報

## 秀 峰

平成 25 年度 第 39 号



2013 年夏のミニフェア（小路幸也氏著書等）の様子

- 巻 頭 文
- 読 書 感 想 文
- 私 の 推 薦 す る 本
- ブ ッ ク ハ ン テ ィ ン グ
- 図 書 館 利 用 統 計

# 巻 頭 文

図書館長 平野 友彦

## 春光台，高専と文学

本年6月28日(土)に、旭川出身の作家三浦綾子さんの代表作『道ありき』の文学碑が、旭川高専近くの春光台公園に立てられ、その除幕式が開催されました。『道ありき』は、三浦さんの闘病生活での心の葛藤を赤裸々に綴った自伝です。ある時、結核で自暴自棄な生活を送る堀田(三浦)綾子が、幼なじみでクリスチャンの前川正に諫められ、生きる目的を改めて見出したと書かれています。この時、正は、傍にあった石で突然自分の足を続けざまに打ちます。綾子を救うことができない不甲斐ない自分を責めてのことでした。これを見た綾子は久し振りに人間らしい涙を流しました。この話の舞台になったのが春光台です。「郭公が遠く近くで啼いているその丘は、元陸軍の演習場でもあった。」「この丘は、徳富蘆花の小説、「寄生木」の主人公篠原良平が、恋の傷手に泣きながら彷徨した丘でもある。」と書かれています。この「寄生木の碑」も春光台にあります。

去年は、旭川ウェルビーイング・コンソーシアム主催で行われた三浦作品に関する二つのイベントに、本校教職員や学生が参加しました。一つは、市内大学図書館と三浦綾子記念文学館の連携による「リレー講演会」、一つは、作品一つを取り上げてその批評を競う「ビブリオバトル」です。前者は、本校図書館前のロビーで開催され、「1時間で分かる三浦綾子！」～超入門～のタイトルで、本校の石本裕之教授と三浦文学館の森下辰衛特別研究員が多くの聴衆を前に講演されました。後者は、本年2月23日(日)三浦文学館において、会場いっぱいに詰めかけた聴衆の中で開催され、本校からは専攻科2年(生産システム工学専攻)の三原基君が『毒麦の季』について発表しました。この発表は多くの来場者の心をつかみ、最多票を得て「チャンプ本」に輝きました。

また、昨年6月～7月にかけて、北海道新聞(金曜夕刊)が企画した「本をめぐるキャッチボール」にも本校学生が参加しました。本校学生と人気作家が本を介したやりとりを新聞紙上で繰り広げるというものです。作家は、『東京バンドワゴン』等で知られ、本校にも在籍された小路幸也さんと、学生は、電気情報工学科4年林広尚君、制御情報工学科4年佐野真奈海さん、専攻科生産システム工学専攻2年三原基君が、小路さんの作品や各自が推薦する本について、それぞれの思いをぶつけ合いました。

このように、去年は、工学系の学校にも関わらず、本校には文学の面でも多くの才能を持った学生達がいることを示すことができた1年だったと思います。春光台は、戦前は第七師団の演習地でしたが、文学との縁も深い場所です。そこに立つ旭川高専も文化の香り漂う学校になっていくことを期待しています。三浦綾子さんの「リレー講演会」は今年度も実施される予定です。是非多くの方に参加していただきたいと思います。

編注：文中の「本年」は平成26年です。

## 読書感想文

井伏鱒二『黒い雨』を読んで

1M 中村邦生

この物語の舞台は日本に原爆が落ちてから数年経ったころの広島県小島村。そこに住む閑閑重松、シゲ子夫妻、重松がひきとった姪の矢須子。重松にはある心配事があった。それは、矢須子の縁談のことである。重松夫妻は被爆したが、矢須子はしていない。はずなのだが、村では矢須子が戦争末期に広島で被爆したため原爆病患者だという噂が立ち、それを縁談にきた人が聞かたびに打ち切りになっていた。ある時、矢須子の縁談がうまくいっていたが、相手から原爆投下の日から小島村に来るまでの足どりを知りたいと言われた。そこで、どうにか矢須子がなんでもないことを伝えるために矢須子がつけていた日記をもとに、今までの足どりを書いていきます。

この物語は、矢須子の縁談を幹に、日記を介して原爆投下のこと、その後の生活、黒い雨などについて見ていきます。見どころはいくつかあり、まず、主題である原爆投下、被爆者の生活です。人の感情、その場の状況、傷の描写などとても生々しく、その光景が目に見えてひしひしと苦しさが伝わってきます。そして、作者の井伏鱒二さんが釣り好きなのもあってか、作中にも釣りや魚の生き生きとした表現が登場します。これもまた、読者の想像をかきたて、とても共感を得られるので、個人的にも好きです。

前記の通り、そのものの描写がリアルで鮮明なので、情景が目には浮かび映画を見ているような感覚になりました。実際、原爆投下時投下後はいったいどの様だったのか、被爆者の苦悩は、というのがとても伝わってきて、より原爆への理解が深まりました。

川口淳一郎、山中伸弥『夢を実現する発想法』を読んで

1E 林 和馬

夢を実現する発想法、この本は IPS 細胞の研究をしている山中伸弥さんと、はやぶさの開発にかかわっている川口淳一郎さんが夢について対談をするという内容の本である。

この本を読んだときこの文章がとてもこころに残った。「どんなに不可能に思えても、絶対にできないとは口にしない。(中略)そして自分たちのやることを世の中の人も認めてくれないわけがないと思い込んでいる」

この対談をした二人の方は今までの人類がやったことのないようなことに挑戦をしている。新しいことに挑戦すると、その時には分からないことがでてきたり、さまざまな壁に当たり挫折しそうになる。そこでさっきの文章が大切になってくる。開発者や研究者のかたに「できない」ということは絶対になく、自分に誇りを持って、あきらめず挑戦を続けていけば最終的にはちゃんと形として残る。このような考え方で夢は実際に実現出来るのだと教えられる内容だった。

太田紫織『櫻子さんの足下には死体が埋まっている』を読んで

2S 内藤加奈

太田紫織さんのミステリー小説であるこの作品を読んで、なぜ、作者は物語の舞台を旭川にしたのか、ということについて見ていこうと思います。

まず、太田さんは札幌市出身で旭川市に在住しています。そのため、旭川を題材にしやすいのではないかということが挙げられます。また、序盤に旭川の説明がされています。「この街には、いたる所に退廃や、停滞といった、鈍重な雰囲気が漂っている。」「旭川の人間は、生来変化と異端を嫌うのだ」と言ったように、札幌から移住してきたからこそ分かる独自の視点からの旭川のイメージと、今回の作品の主人公である九条櫻子が骨好きで、標本など時が止まったものを扱うといった、作品との雰囲気が一致したのではないかと考えました。

作品は骨を中心に回っています。骨を探しに行った先や、骨がある所などに惹きつけられるようにして、ストーリーが進んでいきます。海へ行けばアザラシや、鯨、山へ行けば狐や狸、鹿といった動物の死体が見つかることも、北海道だからこそ出来る設定だと思います。

また作中には北海道の方言や特産物、旭川や周辺の情景などが描かれています。方言を使うと、その方言を使う度に意味や説明、使い方を書かなければなりません。また旭川と設定すると、旭川についても詳しく説明しなければなりません。周辺の情景もその都度書かなければなりません。そのため、作中に多く注記が出てきます。本作品はミステリー小説なので、事件を解決していく上で情景はとても重要なポイントとなってきます。そのため作者はその説明もストーリーの中に入れて進めています。従って、作者は事件を解決していく過程で、北海道や旭川についても読者に理解を深め、興味を持って欲しかったのではないかと考えました。また、旭川市民にはこの本を読んで、もっと地元を活性化させて欲しいという作者からのメッセージもあったと考えます。

梨木香歩『西の魔女が死んだ』を読んで

2C 渡辺七海

逃げ出したい。自分一人じゃ答えが出せない大きな壁にぶつかったときそんな風に思うことがある。それは課題であったり、人間関係だったり、部活動だったり様々である。

そんな時、私は誰かに同意を求めてしまう。しっかり考えても悪い方向に事が進んでしまうのではないかと不安で仕方がないからだ。今まではそれでいいと思っていたし、これからもずっとそうしようとしていた。しかしその考えはこの本に出会ってからいとも簡単に換えられてしまった。

西の魔女とは主人公のまいの祖母にあたる。まいは祖母から魔女の修行を受けることになる。魔女といえば魔法を想像する方も多いだろうがそうではない。祖母が与えられた修行とは規則正しい生活を送る事と、何でも自分で決める事という、一見ごく普通のことかのように思える課題をこなすことである。

例えば、親の言った通りの学校に進学し、言われた通りの就職先に勤めるとする。最初はいいかもしれないが、困難な状況に直面して、辛くなった時どう思うだろうか。「あの時自分で考えた選択をしていれば……」と後悔してしまうのではないだろうか。自分の出した答えが全て正しいとは限らないが、自分で決めた道だから、と納得し頑張れるのではないだろうか。そんな風に私は考える。

何が正しくて正しくないのかは選んだ道に進まないとわからない。どんな道を選んでも挫折しそうになることはあるだろうし、そこで間違えに気づくこともあるだろう。しかしそれは自分が成長出来る良い機会でもあるのだ。何回も間違えて、次にどうやったらより望ましい結果になるか考えていけばいい。重要なのは自分で決めたという事実とその先の経験によって培われていく自信なのである。自分自身の手で喜びや幸せを掴む。それだけでもこれからの日々は全く違ったものになるのではないだろうか。

小川洋子『猫を抱いて象と泳ぐ』を読んで  
3M 西内 廉

この本は中学生の時に親に勧められ読んでみた本です。著者は小川洋子さんで、この本のほかに「妊娠カレンダー」、「薬指の標本」、「博士の愛した数式」などたくさんの有名な本を書いている人です。この本の内容はタイトルからはわかりづらいのですが、とあるチェスプレイヤーの話です。主人公のチェスプレイヤーが伝説のチェスプレイヤーのリトル・アリョーヒンと呼ばれるまでの密やかな奇跡を描いたものです。その奇跡は、デパートの屋上で出会った象のインディラ、壊れた回送バスに住んでいるマスター、海底チェス倶楽部で出会ったチェスドールのリトル・アリョーヒンそういったものとの出会い、別れを繰り返し、たどり着いた老人専用マンション・エチュードで残した棋譜「ビショップの奇跡」そしてそこでのとても静かな最後というものです。

この本を読んだ感想としては、私たちが将来エンジニアとして仕事をしていくことと、主人公がチェス盤の下でチェスをプレイすることは似ているところがあるのではないかと思います。なぜなら、私が考えるエンジニアとは、エンジンの作製、いろいろな機械のパーツ、部品の修理といった仕事をする人のことでどちらかと言うと日陰側の人間であり、エンジニアはいなくてはならないものだと考えていて、それは、主人公も同じで、チェス盤の下でチェスをする日陰側の人間で、彼がいなくてはチェスがプレイできないと考えたためエンジニアと主人公が似ていると思いました。そのため、彼の生きた奇跡を見習うとまではいかななくても、彼の「ビショップの奇跡」ように何かを残せるような人生を送りたいと思いました。

これからの人生のなかで何が起こるかはわかりませんが、将来エンジニアになった時には、何か未来の役に立つような機械、特許などの開発に少しでも携われるようにになりたいと思います。

菅田哲也『武士道シックスティーン』を読んで  
3E 松浦宏法

主人公の一人、香織は幼いころから剣道一筋。全校大会第二位の腕前だが、剣道は斬るか斬られるかの真剣勝負としかとらえていない。そんな香織が優勝して当然の市民大会に出場。その楽勝であるはずの大会で全く無名の選手に鮮やかなメンを取られ負けてしまう。彼女に勝った相手こそ、もう一人の主人公早苗である。早苗は入学した中学校の部活動に日本舞踊がなかったというだけで剣道部に入った素人ではあったが、日本舞踊で鍛えられた足さばきと、ここぞという時の集中力は非凡なものであった。ところが、彼女はそういう自分の実力に気づいていない。そんな二人が同じ高校でチームメイトになってしまう。早苗への復讐心に駆られている香織と、香織と仲良くなりたいたい早苗との交流が熱く語られている。

およそこのようなあらすじであり、主人公の二人が高校生であるので感情移入しやすく、とても読みやすい作品だった。

最初は、とにかく視野狭窄のように感じて鬱陶しさをも覚えるような香織ではあるが、早苗らとのやりとりで新たな考えが生まれてくる様子。早苗も、家庭の事情など複雑な気持ちを抱えながらも前向きに過ごしていく様子。その組み合わせによって、ギスギスした関係もほぐれ、一つの形になっていく。そんな様子が鮮明に描かれてあり、これほどまでに強く印象付けた理由は、各章ごとに香織と早苗の両方の視点でもって語られているからだと思う。

早苗の視点では頑固な姿勢を崩そうとしない香織も、香織の視点になれば様々な葛藤が心の中で渦を巻いている。このように同じ事柄も二人の視点を通じて裏表がわかるため、より切なさやもどかしさのようなものを感じた。

この作品は三部構成で、まだ始めの一部しか読んでいないため、次の『武士道セブンティーン』も早く読みたいと思う。

夏目漱石『それから』を読んで

4S 辻 哲史

この作品で特徴的だと感じたのは序盤と終盤の展開の速さの違いである。序盤は主人公を取り巻く人物を紹介をしながらの展開である。ここでは主人公がどのような人間かを強く訴えているように感じた。そして中盤になると三千代との関係と代助の縁談の話が主になり、序盤のような理屈的な人間であった代助が感情的になっていく姿が伺える。そして終盤になると物語が一気に展開する。

私がこの作品で印象に残っている場面は、代助が三千代に全てを告白する場面である。『「覚えていますか。」「覚えていますわ。』』この会話だけでお互いの心は通じあっていることが読み取れる。またこの場面に類似した場面として三千代が代助に百合の花を渡す場面がある。この二つの場面では共通して銀杏返しを結っていたことと百合の花の香りが漂っていたが挙げられる。特に最初の場面では二つの共通点は三千代によるものであり、この時点で三千代の本心に代助は気付いていたことが伺える。

何故この作品は悲劇的な結末を迎えることとなったのか。私は賽が投げられたときには既にどうだろうと悲劇的な結末を迎えたのではないかと考える。自然な恋愛を選んだ場合はこの作品の通りにならなかったとしても社会的に受け入れられるはずもなくどの道幸福を手にすることは出来なかっただろう。また、社会の掟に従うならば親族の望み通り細君を貰う他はなく、他に愛している人がいながら愛していない人を妻として受け入れるというこれも幸福とは言い難い結末へ向かうのではないだろうか。

ではどうすべきだったのか。これは私は代助の人間性が生んだ悲劇なのではないかと考える。代助は論理的で哲学的な人間であった。しかし当然自然な人間でもあった。しかし学生の頃は感情的な自分を否定してしまった。また現在はその頃とは変わってしまった。もし否定せずにいたならば三千代は平岡に譲らずにいたであろうし、またその頃から変わっていなければ今まで通りの生活であっただろう。私は人間らしさについて深く考えさせられた。

芥川龍之介『河童』を読んで

5S 森田裕也

夏季休暇に入り、僕は前々から気になっていた芥川の著書である「河童」を読んでみることにした。「河童」の冒頭では、精神病棟の描写が始まる。そのことに題名との齟齬を感じながらも、精神病棟の患者二十三号が話す形で物語りは進んでいった。

彼は三年前、ある山を登っている最中に河童に出会う。珍しく思いついて行けば、そこは河童の国だったという。この河童の国では人間社会とは異なる形態を取った社会が形成されており、人間より遥かに洗練され清潔な社会が出来上がっていると彼は話す。

例を挙げれば、資本主義者であるゲエルという河童が説明したことである。河童の国では次々と新しい機械が発明され、そのたびに職工の河童が解雇されていくという。ここで河童の国に迷い込んだ男は、当然の疑問としてストライキや社会問題は起きないのかをゲエルに問う。その答えとしてゲエルは「職工屠殺法」というガスで安楽死した河童を食用にする法律を説明する。男はこの法律に嫌悪感を示すが、これに嫌悪感を示すのはただの感傷主義であり、人間社会ではもっと悲惨で残酷なことが行われているのではないかとゲエルに言われると言葉を失ってしまっていた。

この著書を読んで僕が感じたことは、有名な小説家である芥川龍之介が読者に伝えたかったことは何だったのだろうということだ。当時の日本社会を河童の国との対比を交え痛烈に批判した彼の心境を考えると、法律や社会以前に人間そのものに嫌気がさしているようにも思える。

しかし、この作品は痛烈な風刺も含め非常にユーモラスな文章で描かれている。人間社会とは異なる世界で生きている河童は少し怖くもあるが面白い。現代の社会や法律について、本当によく考えさせられる作品である。

私はこの夏季休暇を利用して、以前から興味を持っていた山田悠介の作品をいくつか読み、その中でも私に一番衝撃を与えた『×ゲーム』について書く。

「×ゲーム」という作品はその名のとおり罰ゲームの事を題材とした作品で、今では映画化もされている作品である。私が思うこの作品の特徴は子供の頃一度は経験のあるであろう罰ゲームをホラーにしたことで読者に親近感を持たせ、より作品に入り込ませることであると私は考える。

作品の肝である内容は、主人公らが小学生の時、ある一人の女の子を罰ゲームと称しイジメていた事が発端で、大人になった現在主人公らがイジメていた女の子に復讐されるという内容である。簡単な内容は書いてあるとおりののだが女の子の復讐が残酷であり非道な復讐であることから女の子の心の闇をうまく表現し、読者に彼女の狂気を伝えている。私が一番彼女に恐怖を感じた部分を紹介すると、主人公が行った旅行先での写真や高校卒業時に撮った写真の全てに彼女が写りこんでいることが発覚した時彼女の行動に恐怖を覚えた。また彼女が復讐として行った罰ゲームはショッキングな内容が多く、読者を恐怖へと陥れる。

この作者の特徴は、冷静さと躍動感のある描写であるとは私は考える。一見この二つは矛盾しているように感じられるが、この二つの描写をうまく用いて作者は緊迫しているシーンや残酷なシーンを描くことで、より読者を作品へと入り込ませてしまうのだと考える。

ぜひこの夏の暑い夜に彼の作品を読むことをおすすめする。きっと、背筋の凍るような物語があなたを待っているだろう。

渡邊 泉『重金属のはなし』を読んで

1A 高田晴旭

本書では、金属の特徴や重金属の定義、人類との関わりなどの基礎的なことから、金属による生命、環境への影響やその対策など、込み入った内容まで書かれている。金属は、産業的に重要な物質であることはもちろんのこと、人類の生命の維持にも使われている。人類は亜鉛、鉄、銅などが生命維持に欠かせない必須元素になっており、金属とは切っても切れない関係である。しかし、金属の種類が問題であり、明らかに害がある金属もある。そこで本書では、生命や環境に大きな影響を与える金属として水銀、カドミウム、鉛、ヒ素の4つに焦点を当てて、日本で過去に起こった公害事件を取り入れて詳しく解説しており、その危険性をわかりやすく説明している。公害といえば四大公害病である水俣病、第二水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病がよく知られており、その内容も新たな事実を含めて書かれている。土呂久のヒ素禍、六価クロム汚染など聞きなれないもののことまで詳しく書かれている。さらに、このような金属の環境汚染による公害の対策として、日本の行政による産業の保護や、重金属毒性の規制などのことも書かれている。

本書を読むことで重金属の産業的な役割や、人類、環境への公害の歴史、さらには、自然科学的な面からのとても広い視点で理解でき、だいぶ知見が広まった。これは重金属に限る話ではないが、多すぎても少なすぎても困るというという根本的な問題があり、それとうまく付き合うことが大事なのだと思った。人類にとってはいい部分でも、地球環境から見れば害でしかないようなものが多々あるので、うまく折り合いをつけ、何事も程よい塩梅で行うことが重要である。いろいろ考えさせられる本なのでぜひ一読してもらいたい。

今野 浩『工学部ヒラノ教授』を読んで

2P 三原 基

さて想像してみましょう。旭川高専の先生たちは、いったいどんなスケジュールで一日を過ごしているのでしょうか。僕の推測ですが、授業、課題やレポート、小テストなどの採点、授業を円滑に行うための準備など、さらに5年生や専攻科生の研究指導、そして学生視点だと意義がよくわからない会議の山。僕には多忙に思えて仕方ありません。

場は変わって、とある大学の工学部。助手となり、キャリアをスタートさせた研究者が大学の工学部を中心にして活躍し、最後は世界的権威に上り詰め、退職するまでのウラ話を、ユーモアたっぷりに語っているのがこの本の内容です。

工学部の教授が書いた文章だから……とイメージされる堅苦しさはなく、いわばエッセイのような内容となっており、さらには高専生ならクスッとくるエピソードもあるため、楽しく読むことができと思います（文中には、ご存知JABEEという単語もありました）。

たとえば、這ってでも教授に上り詰めるための「大学出世スゴロク」、研究費を獲得するための（ちょっと卑怯な）テクニック、国際学会は観光が目的であること、文科省の不条理な決定に翻弄される大学の内部事情など、一般に知られていない大学工学部について、多くのことが語られています。そして最後に筆者は「工学部ヒラノ教授ほど素敵な商売はなかった」と、現役時代を懐かしむ形で締めくくっています。

さて、この本では「工学部の教え 七ヶ条」が紹介されています。要約すると「一、決められた時間や納期には決して遅れないこと」、「二、専門家になって、信頼を勝ち取るべく努力すること」、「三、専門以外は軽々しく口出ししないこと」、「四、頼まれたことは断らないこと」、「五、話は最後まで聞くこと」、「六、学生や仲間をけなさないこと」、そして「七、拙速を旨とすること」の7つです。

さて、皆さんはこれを見てどう感じるでしょうか。ダメ専攻科生の僕は反省の念でいっぱいです。お忙しい先生の皆さん、ごめんなさい。

## 私の推薦する本

石橋湛山『リベラリストの真髄』

機械システム工学科 江頭 竜

この本を読もうと思った動機は2つある。1つは、石橋湛山のことを扱っているNHKの特集シリーズを観て、「こんなにも権力に屈しないジャーナリストがいたのか」と感銘を受け、もっと石橋湛山について知りたいと思ったからだ。もう1つは、自分が国際人であるためには、まず自分の国である日本のことを知らなければならないと常々考えているからだ。これは日本史を学ぶ意義でもあると思う。自分が理系か文系かは関係ない。

簡単に石橋湛山に関する基本情報を書いておく。1884(明治17)年9月25日生まれ、1973(昭和48)年4月25日他界(享年88歳)、東京都出身、早稲田大学卒業、第56代内閣総理大臣(1956年-1957年、在任65日)。湛山に関する有名な言葉としては、「一切を棄つるの覚悟」、「小日本主義」、「私の政治的良心に従います」などがある。

湛山は戦後、内閣総理大臣に就任した政治家として有名であるが、本書ではジャーナリストとしての湛山に重きを置いている。湛山の生きた戦時中は、周知のとおり、政府・軍部による言論弾圧が過酷であった。そのような中でも湛山は、「東洋経済新報」という雑誌で、例えば満州事変、日中戦争、二・二六事件を批判し、日独伊三国軍事同盟、大東亜共栄圏構想に異を唱えた。情報が操作され、日本全体が戦争に突き進む中、弾圧に屈することなく自らの思想を主張し続けた湛山の強固な信念と使命感には感服する。強固な信念も、その思想が間違っていれば極めて危険であるが、湛山の思想は勤勉さと道徳心、良心に裏打ちされているため、時代によらない普遍的な思想に思われる。

客観的な資料に基づく硬い本のわりには一気に読むことができ、現代にも通じる湛山の思想を学ぶことができた。

ジョージ・オーウエル『パリ・ロンドン放浪記』

電気情報工学科 有馬達也

フランスとイギリス両国はいわゆる先進国である。先進国というのは、歴史的に他国に前例がない貧困と人権無視を経験して、はじめて社会保障制度を作り上げてきた。本書は1927年当時のパリ貧民街とロンドンの浮浪者の世界についてのルポルタージュである。富める者と貧しき者が出現するのはいつの世も同じである。しかし両国が近代に入ってから社会保障制度がまだ十分に整っていない時代ではあるが、法による統治があり、宗教の救済があった。そのような時代でも、途方も無い貧困と過酷な生活が社会の底辺に暮らす人々に出現していた。「与えるは受くるより幸いなり」とは聖書の言葉だそうである。そして本書でも教会が浮浪者群に施しを行う場面が書かれている。ある時、集まった浮浪者が教会でいつもの卑屈な態度と違い、礼拝者に無礼な態度をとり、施してくれた牧師に集団で悪態をついたことがあった。理由は教集まった浮浪者の数が多く、恐れる必要がなかったから本音が出たのである。本書ではこう書かれている。「慈善を受ける者は、必ずと言っていいほど、与えてくれる人間を憎むものだーそれが人間性の抜きがたい性癖なのである。」では「施し」ではなく貧者や浮浪者に仕事を与えて代価を払ったらどうなるか。その頃の社会の底辺での仕事がまた極端であり、一日12時間以上、日曜日を除いて重労働の仕事を何年続けても、宿の部屋代を払い、日々のパンとタバコを買ったら何も残らない。また浮浪者は宿泊所に並んでいる不潔で硬いベッドで寝ようとしても、夜中に果てしなく続く咳と、誰かが便器用の鍋にする小便の音でほとんど眠ることができない。そしてわずかな施しを受けた浮浪者からでも、食堂オーナー達は料理の値段を上げて小銭を搾取した。そのような事実が記述されている。本書は近代における「労働」「底辺の生活」というものが最悪どこまで過酷になるか、その源流を示す優れたルポルタージュである。

今野 浩『工学部ヒラノ教授』  
システム制御情報工学科 以後直樹

本のタイトルにあるヒラノ教授とは、本校の平野先生のことでない。著者の名前が、ヒラノなのかと思いきや、名前は今野氏であり、こちらとも違う。それでは、なぜ、ヒラノ教授という名が、タイトルに含まれているかと言えば、平社員などで使用する「一般的な」を意味する「平」を教授に用いた、平教授から来ているようである。

この本は、一言でいえば、大学の教員を務めた著者が、大学内で経験してきた権力争い、国と大学の繋がりなどの表からは知ることが難しい大学の裏事情的なことが書かれた暴露本にも近い内容の本である。具体的な内容は、ここで記載したら、本を読む面白味がないので、割愛する。この著者のアカデミックポストと呼ばれる大学等における経歴は、筑波大学助教授→東京工業大学教授→中央大学教授→東京工業大学名誉教授、というように、働くポストに恵まれている。この著者は、オペレーションズ・リサーチと呼ばれる、あまり聞きなれない研究を行っている。簡単に言えば、数学を用いて、世の中のシステムを最適化しようとする研究であり、金融の世界や軍事の世界で使用されている。そのため、比較的、ご飯が食べやすい研究分野であると思われる。

この本の中に、工学部の教え7ヶ条というものがある。第1条：決められた時間に遅れないこと、第2条：一流の専門家になって、仲間たちの信頼を勝ち取るべく努力すること、第3条：専門以外のことには、軽々に口出ししないこと、第4条：仲間頼まれたことは、断らないこと、第5条：他人の話は最後まで聞くこと、第6条：学生や仲間をけなさないこと、第7条：拙速を旨とすべきこと。最近の大学教育では、このような教えを聞くことは、殆どない。そのため、モラルが低下している大学生を教育するには、このような教えを教え込むことも良いかと思った。

最後に、この本は、大学教員の世界を知ってみたい人、大学教員のポストを目指す先生方は、一読されても良いかと思う。

稲盛和夫『生き方―人間として一番大切なこと』  
物質化学工学科 小寺史浩

これまでにいろいろな本を読んできましたが、何度も読み返す本となると数は少なく、今回はそのうちの一冊をご紹介します。その本は、『生き方・人間として一番大切なこと』です。著者は皆さんもご存じの通り、京セラ創業者である稲盛和夫氏です。

私がこの本に出会ったのは、社会人になって数年目の時です。色々な思いを抱いて、社会に飛び出したものの、厳しい現実の壁に直面している時期でした。友人の一人が京セラに就職し無意識に意識していたのだと思いますが、京セラの文字がおどる稲盛氏の本を何気に手に取ったのが縁でした。

一説をご紹介します。「一生懸命に働くこと、感謝の心を忘れないこと、善き思い、正しい行いに努めること、素直な反省心でいつも自分を律すること、日々の暮らしの中で心を磨き、人格を高めつづけること。すなわち、そのような当たり前のことを一生懸命行っていくことに、まさに生きる意義があるし、それ以外に、人間としての「生き方」はないように思います。」

自分の理想とのギャップに悩む、当時の私にとっては、まさに目から鱗でした。なんという人生哲学だろう。愚直な生き方が、当時の私には、とてもかっこよく思えました。それ以来、私は、この生き方を目標にして今に至ります。とは言っても、言うは易く行うは難し、なかなか道は険しいですが…。

著者は、工学部を出た人物とあって、方程式を用いて人生のよりよい生き方を表現してくれています。【人生・仕事の結果 = 考え方×熱意×能力】ここで、能力とは先天的な資質、熱意とは後天的な努力、考え方とは人格を表します。著者曰く、最も大事なものは、考え方で、能力と熱意は0点から100点まで点数があるのに対し、考え方は-100点から+100点までが存在するとのこと。

現代は、「正直者がバカを見る」風潮が少なからずあるように感じます。そんな中でも、きちんと真面目に「ど真剣に」生きようという気持ちにさせてくれる、長く付き合える一冊です。

書棚から 30 年以上も前に読んだこの本を手に取りページを繰ると、褐色となった紙面に時の流れを感じた。当時「宅浪」して大学受験に備えようとしていた自分の状況と、「独学」という書名を重ね合わせて読んだものである。加藤秀俊は 1930 年生まれ of 社会学者・評論家であり、日本とアメリカで高等教育を受け、また教鞭を取ったことから日本社会に対する比較文化的な視点からの論考も多い。約 40 年前に著されたこの本に書かれているとは言え、社会が変容した今日においても学ぶことの本質を伝えている。

そもそも何かを学ぼうとするとき、あなたは どうするであろうか。自分で本を紐解こうとするか、誰かに教えるを乞おうとするだろうか。学校で学ぶと考えるのは近代において確立された「新興思想」であり、学ぶ気さえあればおよそどんなことでも学べると著者は述べている。書籍やテレビやラジオ、他人から得られる情報がすべてであった 1970 年代においてさである。ものの流通やインターネットに代表される情報化が進んだ今日においては、なおさら個々の学ぼうという確固たる意思があればその後の可能性は無限であるのだ。学ぶ機会、今や一部の権力層や知識層に限られたものではなく、万人が享受できるものである。しかし、そうした情報に恵まれた、ときに情報過多になる社会で情報選択能力を身につけることがその人の人生を選択することに繋がるとも説いている。例えば、今では学校の課題や仕事に必要な情報を得るとき、図書館に足を運ばずともコンピューターの前に座りインターネット上の情報を検索するだけで大方用は足りるようになってしまった。どの情報を選択すべきかを見極めることのできる自己を作り上げなくてはならない。

最後に、この本に記されたことの中からいくつか心に残った言葉を紹介する。「人間が、なにかを学ぼうとするとき、たよりになるのはじぶんじしん以外にはなにもない」。「読書というのは、他人の経験を共有すること」。「『問題』とはそれぞれの個人が『発見』し『つくる』性質のものである」。創造性とは既存の思考にとらわれる知識偏重主義の人間からは生まれない。「上手に外国語を操る人を『国際人』と思うのは間違いであり、まずはきちんとした表現力を持った日本人を作ることが先決」。

人間としての幅を広げるには、常に学ぶことが必要なのは言うまでもない。

紙とペンを用意して少し想像してもらいたい。

「平面上に直線と、直線上に存在しない点が与えられたとき、その点を通り与えられた直線に平行な直線は与えられた平面上にただ 1 本しか引くことができない」

これは当たり前のように感じるかもしれないが、これが成り立たない世界が実は存在する。それが、球面幾何や双曲幾何と呼ばれる世界である。

小中学校では「三角形の内角の和は  $180^\circ$  である」ということを教えているが、世界が変われば当然それも変わる。常識と思っていたことも、実は世界が変われば、非常識なのである。

私は、この本をきっかけに数学にハマった。この本は数学の専門書の読み方を教えてくれた本でもある。一般的に数学の専門書を読むのには時間がかかる。一年で読めれば、良いほうである。行間を補い、なぜそれが成り立つのかチェックしながら進む。さらに、逆の主張は成り立たないか、違う世界でも同様のことは成り立たないかなど寄り道もしたくなる。したがって、常に紙とペンが必要である。まさに牛歩。下手をしたら、戻らないといけなるときもある。結局、私は 1 年では完全に読み通すことができなかった。忙しくなってしまう、残りの 20 ページくらいは読まず…。そして、そのまま…。(本の推薦をする姿勢としては、なってない…) しかしながら、この本のおかげで、全く違う世界を見ることが少しはできた。いや、むしろ、わからないことばかりになって、より一層大変なことになったのかもしれない。

必要な知識も高校程度の数学であるので、具体的な計算を自分で追体験しながら読み進められるところが、非常に良い。授業の数学に飽きた方は、この本を通して学問としての数学に挑んでももらいたい。

## ブックハンティング

平成 25 年 10 月 28 日、市内書店においてブックハンティングを実施しました。参加者は 4 名とやや例年と比べると少人数での実施となりましたが、参加者は熱心に選書をしてくれました。

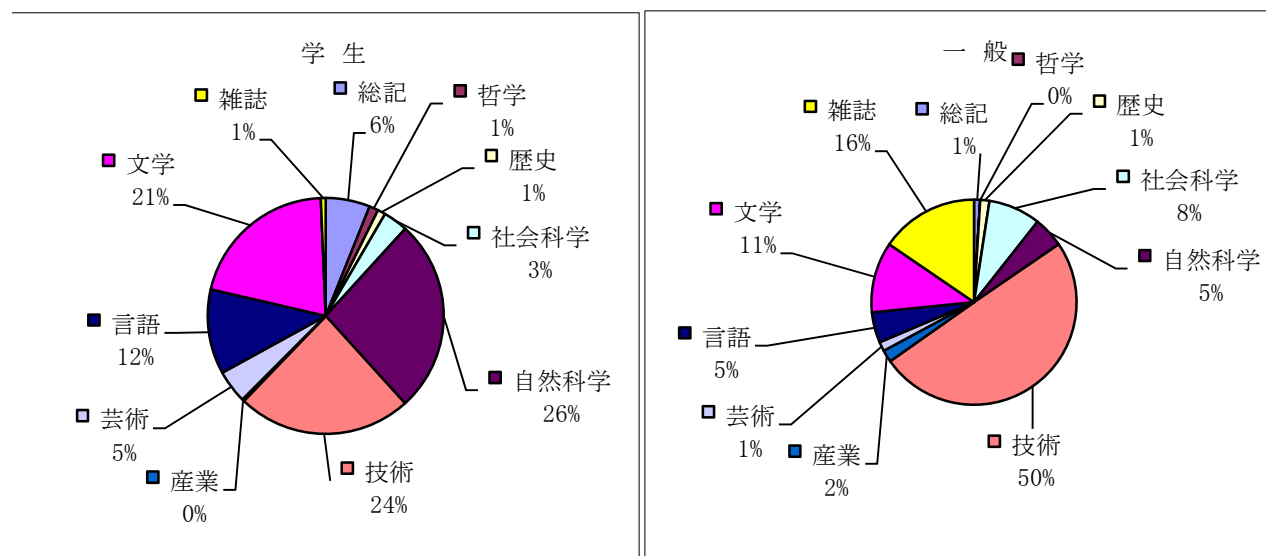
写真は出発前と選書の様子です。

例年ですと参加者の感想文を掲載するのですが、感想文については参加者が感想文を辞退したため、今回は実施の様子のみをお伝えいたします。



## 図書館利用統計（平成24年4月～平成25年3月まで）

### 図書分類別貸出冊数（学生・一般）



|     | 総記  | 哲学 | 歴史 | 社会科学 | 自然科学  | 技術    | 産業 | 芸術  | 言語  | 文学    | 雑誌 | 計     |
|-----|-----|----|----|------|-------|-------|----|-----|-----|-------|----|-------|
| 学 生 | 342 | 70 | 61 | 190  | 1,491 | 1,346 | 16 | 255 | 654 | 1,165 | 38 | 5,628 |
| 一 般 | 2   | 0  | 3  | 17   | 10    | 103   | 4  | 3   | 10  | 23    | 32 | 207   |

## 時間別利用状況（学生・一般）

### 平日昼間

|          | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月  | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 1月    | 2月    | 3月    | 計      |
|----------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 開館日数     | 20    | 19    | 21    | 21    | 21  | 19    | 22    | 21    | 18    | 18    | 18    | 20    | 238    |
| 総入館者数    | 2,936 | 2,818 | 3,290 | 2,688 | 750 | 3,356 | 2,909 | 2,930 | 2,466 | 2,567 | 2,982 | 1,577 | 31,269 |
| 貸出冊数（学生） | 525   | 394   | 365   | 560   | 71  | 226   | 385   | 313   | 492   | 406   | 213   | 214   | 4,164  |
| 貸出冊数（一般） | 19    | 18    | 11    | 13    | 11  | 18    | 9     | 13    | 10    | 8     | 8     | 6     | 144    |
| 貸出者数（学生） | 254   | 298   | 284   | 254   | 45  | 133   | 204   | 166   | 222   | 214   | 116   | 84    | 2,274  |
| 貸出者数（一般） | 7     | 6     | 4     | 6     | 4   | 5     | 4     | 8     | 4     | 4     | 3     | 3     | 58     |

### 平日夜間

|          | 4月  | 5月  | 6月  | 7月  | 8月 | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 | 1月  | 2月  | 3月  | 計     |
|----------|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 開館日数     | 15  | 19  | 21  | 17  | 0  | 19  | 18  | 21  | 15  | 17  | 17  | 8   | 187   |
| 総入館者数    | 566 | 691 | 745 | 571 | 0  | 788 | 525 | 923 | 546 | 785 | 847 | 160 | 7,147 |
| 貸出冊数（学生） | 153 | 127 | 132 | 132 | 1  | 90  | 80  | 155 | 163 | 141 | 92  | 40  | 1,306 |
| 貸出冊数（一般） | 7   | 2   | 0   | 9   | 0  | 9   | 10  | 6   | 0   | 0   | 3   | 0   | 46    |
| 貸出者数（学生） | 78  | 102 | 101 | 58  | 1  | 41  | 46  | 68  | 65  | 68  | 48  | 17  | 693   |
| 貸出者数（一般） | 3   | 1   | 0   | 3   | 0  | 3   | 4   | 3   | 0   | 0   | 1   | 0   | 18    |

### 土曜日

|          | 4月 | 5月 | 6月  | 7月 | 8月 | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 | 1月  | 2月  | 3月 | 計     |
|----------|----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-------|
| 開館日数     | 2  | 3  | 4   | 2  | 0  | 2   | 3   | 3   | 2   | 2   | 3   | 2  | 28    |
| 総入館者数    | 70 | 74 | 217 | 56 | 0  | 104 | 110 | 115 | 106 | 106 | 102 | 73 | 1,133 |
| 貸出冊数（学生） | 13 | 16 | 20  | 16 | 0  | 1   | 21  | 16  | 10  | 16  | 17  | 12 | 158   |
| 貸出冊数（一般） | 1  | 0  | 5   | 2  | 0  | 0   | 0   | 4   | 3   | 0   | 0   | 2  | 17    |
| 貸出者数（学生） | 7  | 13 | 17  | 6  | 0  | 1   | 9   | 7   | 5   | 8   | 5   | 5  | 83    |
| 貸出者数（一般） | 1  | 0  | 2   | 1  | 0  | 0   | 0   | 2   | 1   | 0   | 0   | 1  | 8     |

### 合計

|          | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月  | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 1月    | 2月    | 3月    | 計      |
|----------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 開館日数     | 22    | 22    | 25    | 23    | 21  | 21    | 25    | 24    | 20    | 20    | 21    | 22    | 266    |
| 総入館者数    | 3,572 | 3,583 | 4,252 | 3,315 | 750 | 4,248 | 3,544 | 3,968 | 3,118 | 3,458 | 3,931 | 1,810 | 39,549 |
| 貸出冊数（学生） | 691   | 537   | 517   | 708   | 72  | 317   | 486   | 484   | 665   | 563   | 322   | 266   | 5,628  |
| 貸出冊数（一般） | 27    | 20    | 16    | 24    | 11  | 27    | 19    | 23    | 13    | 8     | 11    | 8     | 207    |
| 貸出者数（学生） | 339   | 413   | 402   | 318   | 46  | 175   | 259   | 241   | 292   | 290   | 169   | 106   | 3,050  |
| 貸出者数（一般） | 11    | 7     | 6     | 10    | 4   | 8     | 8     | 13    | 5     | 4     | 4     | 4     | 84     |

## 編集後記

「秀峰」（図書館報）39号の発行に際し、皆様に原稿をお寄せいただき発行できました。この場を借りてお礼を申し上げます。種々の事情により、発行が大幅に遅れてしまいましたこととお詫びいたします。

今回は、読書感想文と私の推薦する本で同一の図書が取り上げられました。図書の選定については特に指定をしておりませんので、偶然の一致ということになります。学生と教員で視点の違いを比較しながら読むのもおもしろいかも知れません。

また、今号から発行の形態を見直した結果、本校 Web サイトにて公開という形になりました。今後は Web サイトでの公開という形を活かした編集にしたいと思います。

「秀 峰」 旭川工業高等専門学校図書館報 第39号 平成27年 発行  
 編 集 委 員 平野 友彦（委員長）・土橋 剛・後藤 孝行・有馬 達也・  
 大柏 哲治・宮越 昭彦・水野 優子・松井 秀徳・小笠原 守  
 発 行 所 旭川工業高等専門学校